

教科担任制が小学校教員志望学生に及ぼす影響

— 体育に着目して —

Effects of Subject Teacher System in Elementary School on the Attitude of Students Who Major Elementary School Course

— Focusing on Physical Education —

胡 泰 志・古 谷 嘉一郎¹・梶 田 英 之

EBISU Yasushi, FURUTANI Kaichiro and KAJITA Hideyuki

キーワード：教科担任制，体育，小学校教員志望学生，教師効力感，Grit-S

I. 目的

文部科学省が令和3年7月に公表した「義務教育9年間を見通した教科担任制の在り方（報告）」（2021）によると，小学校高学年における教科担任制について優先的に専科指導の対象とすべき教科として外国語，理科，算数および体育をあげている。体育を対象とした理由として，運動が苦手な児童を含む全ての児童にできる喜びを味わわせていくことが求められることや，学年が上がるにつれて技能差や体力差が広がりやすいこと等から，教科指導の専門性や系統的指導の必要性があげられている。また，専科指導の専門性を客観性のある形で担保することが望ましいとも述べられており，その例として中学校又は高等学校の免許状の保有があげられている。

小学校教員免許が取得可能な養成機関のうち，中学校や高等学校の保健体育科教員免許も同時に取得できる養成機関は多くない。また，中高の保健体育科教員免許を取得するためには小学校教員免許取得に必要な内容を修得することに加え，小学校体育より高度に専門化された内容を修得する必要がある。これらのことから，中高の保健体育科教員免許も取得した小学校教員数は急激には増加しないと考えられる。そのため，小学校体育の教科担任制を推進していくためには，中高の保健体育科教員免許取得者を増やしていくことに加え，中高の保健体育科教員免許を取得できない養成機関からも小学校体育専科教員を志望する学生を増やす必要がある。

一方で，小学校教員免許を取得するためには体育以外の教科の内容を修得することから，体育以外の教科が得意な学生や体育が苦手な学生も存在する。また，中高の保健体育科教員免許を取得できない養成機関や規模の小さい小学校教員養成機関では，高度に専門化された体育の授業を幅広く実施することは難しいと考えられる。そのため，これらの養成機関で学ぶ学生が小学校体育科専科教員を目指す場合は，採用後に自ら体育の指導スキルを高めていく必要がある。

以上のことから，中高の保健体育科教員免許を取得できない小学校教員養成機関において，在学中に小学校体育の教科担任制について肯定的な認識を高めておくことは重要であるといえる。そこで，本研究では中高の保健体育科教員免許を取得予定のない小学校志望学生を対象に，小学校体育の教科担任制に関する認識に及ぼす影響について検討することを目的とした。

¹ 北海学園大学経営学部経営情報学科（行動科学系）

II. 方法

A. 調査対象者及び調査方法

研究対象者として H 大学 1 年生 58 名 (男子 15 名, 女子 43 名) および 4 年生 41 名 (男子 22 名, 女子 19 名) を選出した。これらの学生は保育教育職を志望する学科の学生で, 小学校教諭一種免許, 幼稚園教諭一種免許および保育士資格を取得予定である。また, 4 年生のうち, 小学校教員志望学生のほとんどは小学校教員採用試験に合格しており, 不合格者も卒業後は臨時任用として小学校教員になる予定である。

本研究では, 小学校に教科担任制を導入することに関する新聞記事 (日本経済新聞, 2021) および「義務教育 9 年間を見通した指導体制の在り方について (報告)」(文部科学省, 2021) を基に, 小学校体育科における専科制導入に関する説明文を作成した。研究対象者は説明文による説明を受けた上で質問紙調査を行なった。調査に際しては, 調査内容, 目的, データの取り扱い及び, 本調査が授業成績には全く影響しないことを十分説明した上で協力を依頼し, 学生は自由意志に基づき無記名で調査に参加した。

B. 質問紙の内容

1. 進路に関する項目 (3 項目)

まず, 調査対象者の希望する進路を尋ねた。次に, 希望した進路の志望の程度を「1: 全くなりたくない」から「5: 非常にになりたい」の 5 件法で尋ねた。さらに, 希望した進路に就く自信の程度について「1: 全く自信がない」から「5: 非常に自信がある」の 5 件法で尋ねた。

2. 体育および小学校体育専科に関する項目 (7 項目)

まず, 体育の授業に対する苦手意識, 体育の授業に対する愛好度, 体育の授業を教える自信, 体育の授業を実施する意欲について 5 件法で尋ねた (胡・古谷, 2017)。次に, 小学校の体育専科教員を希望する程度を「1: 全くなりたくない」から「5: 非常にになりたい」の 5 件法で尋ねた。さらに, 体育専科教員に就く自信の程度について「1: 全く自信がない」から「5: 非常に自信がある」の 5 件法で尋ねた。

3. 教師効力感に関する意識項目 (26 項目)

教師効力感に関する質問項目として, 春原 (2007) が作成した教育学部生用教師効力感尺度 26 項目を用いた。それぞれの項目について「1: まったくあてはまらない」から「5: 非常にあてはまる」の 5 件法で尋ねた。

4. Grit-S に関する意識項目 (8 項目)

やり抜く力に関する質問項目として, Duckworth & Quinn (2009) が作成した 8 項目版の Short Grit (Grit-S) 尺度を, 西川ら (2015) が邦訳した日本語版 Short Grit (Grit-S) 尺度 (8 項目) を使用した。それぞれの項目について「1: 当てはまらない」, 「2: やや当てはまらない」, 「3: どちらとも言えない」, 「4: やや当てはまる」, 及び「5: 当てはまる」の 5 件法で尋ねた。

5. 自尊心に関する意識項目 (10 項目)

自尊心に関する質問項目として, Rosenberg (1965) が作成した, 自尊感情尺度 10 項目を, 山本・松井・山成 (1982) が邦訳したものを使用した (清水, 2001)。それぞれの項目について「1: あてはまらない」, 「2: ややあてはまらない」, 「3: どちらともいえない」, 「4: ややあてはまる」, 及び「5: あてはまる」の 5 件法で尋ねた。

6. 学年, 性別及び年齢

調査対象者の学年, 性別及び年齢を尋ねた。

Ⅲ. 結果

A. 分析対象者

調査対象者のうち、回答の欠損などの回答に不備がない者から志望進路として小学校教員を選択した者のみを選出して分析対象とした。その結果、分析対象者はH大学1年生24名（男子11名、女子13名）および4年生32名（男子20名、女子12名）であった。年齢はH大学1年生が18.6±.50歳（平均±SD、以下同じ）、4年生が21.5±.51歳であった（表1）。

表1. 分析対象者の性及び年齢

	男	女	合計	年齢（歳） （平均±SD）
1年	11	13	24	18.6±.50
4年	20	12	32	21.5±.51
合計	31	25	56	

B. 小学校における体育専科に関する認識と体育および進路等に関する認識との相関関係

本研究の分析対象者56名における、小学校体育専科に関する認識と体育に関する認識との相関関係を表2に示した。その結果、将来小学校体育専科の教員を希望する程度と体育の授業が得意な程度との間に強い相関関係（ $r=.727, p<.001$ ）が認められた。体育の授業に対する好悪の程度との間については比較的強い相関関係（ $r=.575, p<.001$ ）が認められた。子ども達に体育の授業を教える自信の程度との間についても比較的強い相関関係（ $r=.613, p<.001$ ）が認められた。子ども達に体育の授業実施を希望する程度との間についても比較的強い相関関係（ $r=.672, p<.001$ ）が認められた。小学校教員になるために体育について努力する必要性の程度との間については有意な相関関係は認められなかった。また、将来小学校体育専科の教員になる自信の程度と体育の授業が得意な程度との間に強い相関関係（ $r=.731, p<.001$ ）が認められた。体育の授業に対する好悪の程度との間については比較的強い相関関係（ $r=.580, p<.001$ ）が認められた。子ども達に体育の授業を教える自信の程度との間についても比較的強い相関関係（ $r=.669, p<.001$ ）が認められた。子ども達に体育の授業実施を希望する程度との間についても比較的強い相関関係（ $r=.692, p<.001$ ）が認められた。小学校教員になるために体育について努力する必要性の程度との間については有意な相関関係は認められなかった。

本研究の分析対象者における、小学校体育専科に関する認識と進路等に関する認識との相関関係を表3に示した。その結果、将来小学校体育専科の教員になる自信の程度と教師効力感との間に弱い相関関係（ $r=.330, p<.05$ ）が認められた。また、自尊感情との間にも弱い相関関係（ $r=.258, p=.055$ ）が認められた。小学校教員を志望する程度、小学校教員に就く自信の程度、Grit-Sとの間には有意な相関関係は認められなかった。将来小学校体育専科の教員を希望する程度との間にはいずれの認識とも有意な相関関係は認められなかった。

以上のことから、本研究の分析対象者の小学校体育専科に対する認識は体育に対する認識と強く関連しており、教師効力感および自尊感情と弱く関連していた。

表2. 小学校における体育専科に関する認識と体育に関する認識間との相関

	体育得意	体育好悪	体育授業自信	体育授業希望	体育努力必要性
体育専科希望	.727***	.575***	.613***	.672***	-.071
体育専科自信	.731***	.580***	.669***	.692***	-.072

n = 56

*** $p<.001$

表3. 小学校における体育専科に関する認識と進路等に関する認識間との相関

	志望程度	就職自信	教師効力感	Grit-S	自尊感情
体育専科希望	.106	.066	.209	.131	.164
体育専科自信	.161	.055	.330*	.195	.258 †

n = 56 † p=.055, *p<.05

C. 小学校における体育専科に関する認識と学年や体育および進路等に関する認識の程度との関係

体育および進路等に関する認識について、学年と認識の程度の関係が体育専科に及ぼす影響について分析した。分析に先立ち各項目を高群および低群の2群に分けた。進路および体育に関する項目については、「4」または「5」と回答した者を高群とし、それ以外を回答した者を低群とした。教師効力感、Grit-S、自尊感情については中央値を用いて高群と低群に分けた。

小学校体育専科の教員を希望する程度と各項目に関する認識との分析結果を表4に示した。体育の授業が得意な程度については、得意な程度の主効果が認められ ($F(1, 52) = 27.314, p < .001$)、体育の授業が得意だと認識している群の方がそうでない群と比べ、より強く小学校体育科の教員を希望していた ($p < .001$)。体育の授業に対する好悪の程度については、好悪の程度の主効果が認められ ($F(1, 52) = 6.891, p < .05$)、体育の授業が好きだと認識している群の方はそうでない群と比べ、より強く小学校体育科の教員を希望していた ($p < .05$)。子ども達に体育の授業を教える自信の程度については、授業を教える自信の程度の主効果が認められ ($F(1, 52) = 15.346, p < .001$)、子ども達に体育の授業を教える自信があると認識している群の方がそうでない群と比べ、より強く小学校体育科の教員を希望していた ($p < .001$)。子ども達に体育の授業実施を希望する程度については、授業実施を希望する程度的主効果が認められ ($F(1, 52) = 25.433, p < .001$)、子ども達に体育の授業を教えたいと認識している群の方がそうでない群と比べ、より強く小学校体育科の教員を希望していた ($p < .001$)。Grit-Sについては交互作用が認められた ($F(1, 52) = 5.044, p < .05$)。単純主効果検定の結果、1年生においてGrit-Sの単純主効果が認められ ($F(1, 22) = 6.485, p < .05$)、Grit-Sが高い群は低い群と比べ、より強く小学校体育科の教員を希望していた ($p < .05$)。また、Grit-S高群において学年の単純主効果が認められ ($F(1, 26) = 5.879, p < .05$)、1年生は4年生と比べ、より強く小学校体育科の教員を希望していた ($p < .05$)。小学校教員を志望する程度、小学校教員に就く自信の程度、小学校教員になるために体

表4. 小学校における体育専科教員を希望する程度と体育および進路等に関する認識間との関係

	高群 (平均±SD)		低群 (平均±SD)		被検者間効果		被検者内効果	
	1年	4年	1年	4年	F値 (1, 52)	n.s.	F値 (1, 52)	n.s.
進路								
志望程度	2.8 ± 1.45	2.3 ± 1.30	2.0 ± .00	3.0 ± 1.63	.224	n.s.	.002	n.s.
就職自信	3.1 ± 1.37	2.4 ± 1.23	2.4 ± 1.34	2.4 ± 1.67	.783	n.s.	.697	n.s.
体育授業得意	3.1 ± 1.28	3.2 ± 1.22	1.3 ± .52	1.6 ± .89	.220	n.s.	27.314***	高>低
体育授業好悪	2.9 ± 1.35	2.6 ± 1.36	1.3 ± .58	1.5 ± .84	.013	n.s.	6.891*	高>低
体育授業自信	3.1 ± 1.29	3.2 ± 1.30	2.0 ± 1.25	1.8 ± 1.03	.035	n.s.	15.346***	高>低
体育授業希望	3.5 ± 1.09	2.8 ± 1.24	1.5 ± .71	1.7 ± 1.23	.737	n.s.	25.433***	高>低
体育努力必要性	2.7 ± 1.39	2.3 ± 1.27	2.0 ± 1.41	3.0 ± 1.83	.203	n.s.	.000	n.s.
教師効力感	2.8 ± 1.34	2.3 ± 1.23	2.5 ± 1.51	2.4 ± 1.43	.439	n.s.	.055	n.s.
Grit-S	3.4 ± 1.12	2.2 ± 1.25	2.1 ± 1.32	2.5 ± 1.46	.907 †			
自尊感情	2.9 ± 1.30	2.2 ± 1.28	2.5 ± 1.45	2.6 ± 1.41	.709	n.s.	.010	n.s.

※高：高群，低：低群

† 交互作用，* p<.05, *** p<.001

育について努力する必要性の程度，教師効力感および自尊感情についてはいずれの主効果も認められなかった。以上のことから，体育が得意な者ほど小学校体育専科の教員になることを強く希望することが示された。また，1年生は Grit-S が高い者ほど小学校体育専科の教員になることを強く希望し，Grit-S が高い1年生は Grit-S が高い4年生より小学校体育専科の教員になることを強く希望することが示された。

小学校体育専科の教員になる自信の程度と各項目に関する認識との分析結果を表5に示した。体育の授業が得意な程度については，得意な程度の主効果が認められ ($F(1, 52) = 35.274, p < .001$)，体育の授業が得意だと認識している群の方がそうでない群と比べ，小学校体育科の教員になる自信をより強く有していた ($p < .001$)。体育の授業に対する好悪の程度については，好悪の程度的主効果が認められ ($F(1, 52) = 7.629, p < .01$)，体育の授業が好きだと認識している群はそうでない群と比べ，小学校体育科の教員になる自信をより強く有していた ($p < .01$)。子ども達に体育の授業を教える自信の程度については，授業を教える自信の程度的主効果が認められ ($F(1, 52) = 19.587, p < .001$)，子ども達に体育の授業を教える自信があると認識している群の方がそうでない群と比べ，小学校体育科の教員になる自信をより強く有していた ($p < .001$)。子ども達に体育の授業実施を希望する程度については，授業実施を希望する程度的主効果が認められ ($F(1, 52) = 26.601, p < .001$)，子ども達に体育の授業を教えたいと認識している群の方がそうでない群と比べ，小学校体育科の教員になる自信をより強く有していた ($p < .001$)。Grit-S については，Grit-S の程度の影響を受ける傾向が認められ ($F(1, 52) = 3.293, p = .075$)。Grit-S が高い群は低い群と比べ，小学校体育科の教員になる自信をより強く有する傾向が認められた ($p = .075$)。小学校教員を志望する程度，小学校教員に就く自信の程度，小学校教員になるために体育について努力する必要性の程度，教師効力感および自尊感情についてはいずれの主効果も認められなかった。以上のことから，体育が得意な者ほど小学校体育専科の教員になる自信を有することが示された。また Grit-S が高い者ほど小学校体育専科の教員になる自信を有する傾向があることが示された。

IV. 考察

本研究の結果，小学校体育専科教員を希望する程度および小学校体育専科教員になる自信の程度について，体育の授業に対する認識の主効果が認められたことから，まずは在学中に体育に対する肯定的な認識を維持し続けることが重要であると考えられる。一方で，「義務教育9年間を見通した教科担任制の在り方について（報告）」では，専科教員が配置されている教科も含めて全ての教

表5. 小学校における体育専科教員に就く自信の程度と体育および進路等に関する認識間との関係

		高群 (平均±SD)		低群 (平均±SD)		被検者間効果		被検者内効果	
		1年	4年	1年	4年	F値 (1, 52)	n.s.	F値 (1, 52)	n.s.
進路	志望程度	2.7 ± 1.31	2.2 ± 1.10	1.7 ± .58	2.8 ± 1.26	.367	n.s.	.282	n.s.
	就職自信	2.9 ± 1.37	2.3 ± 1.06	2.4 ± 1.22	2.2 ± 1.30	1.142	n.s.	.836	n.s.
体育授業	体育授業得意	3.0 ± 1.19	3.1 ± .93	1.3 ± .52	1.5 ± .63	.178	n.s.	35.274***	高>低
	体育授業好悪	2.8 ± 1.26	2.5 ± 1.10	1.3 ± .58	1.5 ± .84	.024	n.s.	7.629**	高>低
	体育授業自信	3.0 ± 1.18	3.2 ± .99	2.0 ± 1.25	1.7 ± .75	.085	n.s.	19.587***	高>低
	体育授業希望	3.3 ± 1.07	2.7 ± .98	1.6 ± .84	1.6 ± 1.00	1.229	n.s.	26.601***	高>低
	体育努力必要性	2.6 ± 1.29	2.2 ± 1.06	2.0 ± 1.41	3.0 ± 1.41	.251	n.s.	.029	n.s.
教師効力感	2.7 ± 1.30	2.6 ± 1.08	2.4 ± 1.30	2.1 ± 1.12	.315	n.s.	1.387	n.s.	
Grit-S	3.2 ± 1.17	2.3 ± 1.11	2.1 ± 1.19	2.3 ± 1.16	1.251	n.s.	3.293 ††	高>低	
自尊感情	3.0 ± 1.27	2.3 ± 1.14	2.2 ± 1.24	2.3 ± 1.13	1.090	n.s.	1.689	n.s.	

※高：高群，低：低群

†† $p = .075$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

員が指導する教科等について広く理解し、その連関を踏まえながら指導力を向上し、広い視野で指導が行われるよう留意する必要性についても述べられており（文部科学省，2021）、体育専科以外の教員に対しても体育に関する一定レベル以上の理解が求められる。また、小学校教員養成機関には体育以外の教科が得意な学生や体育が苦手な学生も存在する。これらの学生は体育や体育に関する学びを深めることを回避しがちであると考えられる。体育は「できる」「できない」がはっきりと分かりやすい教科である。体育が「できる」学生は体育に対する肯定的な認識を比較的維持しやすいが、体育が「できない」学生は体育に対する肯定的な認識を維持することが難しく、場合によっては否定的な認識すら持つ可能性がある。一方で、より効果的な体育の授業を行うためには、体育が得意な教員の視点も必要であるが、体育が得意でない或いは体育が苦手な教員の視点も体育の苦手な児童を理解する上で欠かせない。したがって、単に体育が得意な学生を増やすだけでなく、体育が苦手な学生に対しても体育に対する肯定的な認識を涵養していくことが重要であるといえよう。

本研究では小学校教員志望の1年生および4年生を対象とした。1年生は大学に入学後半年しか経っておらず、小学校教員を志望しているものの小学校に関する知識をほとんど有していないと考えられる。一方、4年生は小学校教員採用試験を受験しており、そのほとんどが採用試験に合格している。不合格であった者も卒業後は臨時任用等で小学校教員になる予定である。そのため、4年生は小学校教員としての必要最低限の知識を有しているもの実際の教員としての経験は有していないと言えよう。これらのことから、在学中に小学校体育に関する知識を体系的に習得させていくとともに、実践的な経験を少しでも積み重ねていく等の工夫が必要であると考えられる。

また、本研究の結果、Grit-Sが高いほど小学校体育専科教員に対する認識が高くなっていった。Grit-Sはやり抜く力とも言われ、「一貫性」と「根気」の2つの下位因子で構成されている。一貫性は同じ目標に継続して取り組むことができる性格特性で、根気は人生で挫折や失敗を経験したときに諦めずに取り組むことができる性格特性である（鈴木・元廣・木村・内田・堀江・橋本，2017）。小学校教員志望学生は採用された後も実践経験を通してその資質能力のさらなる向上を図ることが求められる。「義務教育9年間を見通した教科担任制の在り方について（報告）」（文部科学省，2021）には、専科指導の専門性を担保する方策について、中高の免許状の保有や専門性向上のための免許法認定講習の受講・活用、教科研究会等の活動実績等を組み合わせるなどして適用することが考えられるとしている。これらのことから、小学校体育専科教員になったとしても、長期にわたって継続して体育に関する研鑽を積んでいく必要があるといえよう。長期的な取り組みを必要とする目標達成のためには、誘惑を避けて目標からそれない自己コントロールだけでは不十分であり、困難を越えて目標を追求する熱意も必要である（西川・奥上・雨宮，2015）。さらに小学校教員として自らの能力を向上させ続ける過程において、やり抜く力を維持していくためには教師効力感および自尊感情を高めておくことは不可欠であると考えられる。教師効力感とは、「学級管理・運営効力感」「教授・指導効力感」「子ども理解・関係形成効力感」の3つの下位因子で構成されており、教員の実践力を説明・予測するのに有効な概念である（春原・坂西，2010）。自尊感情とは、人が自分自身についてどのように感じるのかという感じ方のことであり、自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚である（清水，2001）。本研究においては、教師効力感および自尊感情の影響については明らかにならなかったが、何らかの関係があると推察されるため今後の課題としたい。

V. 要約

本研究では小学校教員志望大学1年生24名（男子11名，女子13名）および4年生32名（男子20名，女子12名）学生を対象に、小学校体育科に教科担任制を導入することに関する認識に

対する影響について検討した。その結果、小学校体育専科教員に関する認識について、体育の授業に対する認識の影響が認められ、体育に対する認識が肯定的であるほど小学校体育専科教員を希望する程度および小学校体育専科教員になる自信の程度が高かった。また、やり抜く力が強いほど小学校体育専科教員に対する認識が高かった。これらのことから、小学校体育の教科担任制を推進していく観点から小学校教員養成機関では体育に関する肯定的な認識を涵養するとともに、粘り強くやり抜く力を育成していくことが必要であると考えられる。

引用・参考文献

- 胡 泰志・古谷嘉一郎（2017）. 小児心肺蘇生講習が保育観察実習参加学生に及ぼす影響－JRC 蘇生ガイドライン改定を受けて－ 比治山大学現代文化学部紀要, 23, 105-113.
- 春原淑雄（2007）. 教育学部生の教師効力感に関する研究－尺度の作成と教育実習にともなう変化－ 日本教師教育学会年報, 16, 98-108.
- 春原淑雄・坂西友秀（2010）. 「教職入門」における模擬授業が教師効力感に及ぼす効果 埼玉大学紀要教育学部, 59, 5-65.
- 文部科学省（2021）. 義務教育9年間を見通した教科担任制の在り方について（報告）〈https://www.mext.go.jp/content/20210729-mxt_zaimu-000015519_1.pdf〉.
- 日本経済新聞（2021）. 〈<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUE212SQ0R20C21A7000000/>〉 2021年7月21日 19:23（2021年7月22日 10:40 更新）.
- 西川一二・奥上紫緒里・雨宮俊彦（2015）. 日本語版 Short Grit（Grit-S）尺度の作成パーソナリティ研究, 24, 167-169.
- 清水 裕（2001）. 自尊感情尺度 山本眞理子（編）心理測定尺度集Ⅰ サイエンス社 pp.29-31.
- 鈴木 哲・元廣 惇・木村愛子・内田美美佳・堀江貴文・橋本広徳（2017）. T 理学療法士の養成校の学生における Grit と職業的アイデンティティの関係 理学療法科学, 32, 569-572.